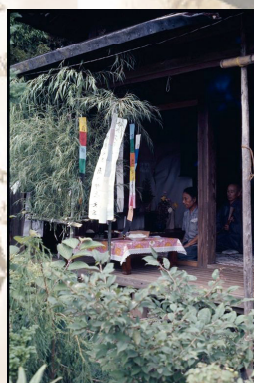


平成23年度熊本県松橋収蔵庫第4回企画展

熊本の祈りと感謝

— 民俗写真家の眼差し —

白石巖民俗写真展 I



2012

熊 本 県

平成23年度熊本県松橋収蔵庫第4回企画展

熊本の祈りと感謝

ー民俗写真家の眼差しー

白石巖民俗写真展 I

2012

熊 本 県

はじめに

白石巖氏は、熊本で祭りや行事、人々の暮らしぶりなどの民俗写真を長年にわたり撮影されました。平成7年に亡くなられた後、遺族の方から、白石氏が撮影された膨大な写真やフィルムと民俗調査データが県に寄贈されました。白石氏の写真資料は観光客が訪れるような有名な祭りだけではなく、地域の人々がひっそりと行なってきた各地の民俗行事を丹念に撮影していること、更に、写真だけではなく、撮影した際の民俗調査データが残されていることなどで第一級の民俗写真資料として高く評価されています。県では寄贈を受けて以来、写真の整理、デジタル化、資料登録を行なってきました。今回の企画展は、白石氏が撮影した民俗写真のうちカラー写真についてのデジタル化、資料登録、目録作成が完了したことを機会に開催するものです。

私たちは正月、盆、節句などの年中行事、人が生まれてから死ぬまでの人生の節目、神社の祭礼など、さまざまな機会に豊作、豊漁や健康などへの祈りや感謝を表す祭りや儀礼を行ってきました。今回の企画展では、そのような祈りと感謝を表す写真を選び展示しています。白石氏の写真を通して、熊本に暮らしてきた人々の祈りや感謝の気持ちを感じ取っていただければ幸いです。



白石巖氏

大正10年生 平成7年逝去
元熊本民俗文化研究会会長

主な著作物

「肥後の伝説」(共著 第一法規出版)「熊本の風土とところ 熊本の祭り」(写真・文 熊本日日新聞社)「熊本の祭り」(共著 熊本日日新聞社)「祭礼行事・熊本県」(共著 おうふう)「熊本市民俗調査報告書」(共著 熊本市教育委員会)「大津町史」(共著 大津町)「旭志村史」(共著 旭志村)「新熊本市史 別編2」(共著 熊本市)

目次

1	なれなれなすび	4	20	盆の仏壇	23
2	古代楽	5	21	地蔵祭り	24
3	このみや踊り	6	22	八朔のナスビウマ	25
4	赤仁田の盆踊り	7	23	十五夜綱引きの大草履	26
5	二瀬本神楽	8	24	白梅天満宮の風神大根	27
6	八代神社の田植祭	9	25	亥の子搦き	28
7	スッキョン	10	26	大黒さん迎え	29
8	サンヤサン	11	27	七五三	30
9	伊倉北・南八幡宮の練り嫁	12	28	高橋のえびす祭り	31
10	水神祭り	13	29	杉水の節頭渡し	32
11	円性寺の四十八夜大法要祭	14	30	二の丸の神さん送り	33
12	端午の節句の地搦き	15	31	早鷹天神	34
13	野原八幡宮の御田植祭	16	32	岩本の巻天神	35
14	サナブリのお座敷田植え	17	33	山王神社の甘酒祭り	36
15	虫追い	18	34	正月	37
16	精霊流し	19	35	山の神	42
17	七夕綱	20	36	カワマツリ	47
18	七夕棚	21	37	秋祭り	52
19	オトリコシ	22			

凡例

- ・本書は熊本県松橋収蔵庫において、平成24年3月15日から5月30日まで開催している平成23年度第4回企画展「熊本の祈りと感謝 ―民俗写真家の眼差し― 白石巖民俗写真展I」の展示図録として作成した。
- ・「熊本の祈りと感謝 ―民俗写真家の眼差し― 白石巖民俗写真展I」の展示及び本書の編集、執筆は熊本県文化企画課博物館プロジェクト班國本信夫、迫田久美子が担当した。



なれなれなすび

山鹿市長坂 1977年撮影 35mmカラーポジ

3月9日の夜の11時頃、長坂厳島神社で演じられます。ドラと呼ばれる太鼓と歌に合わせて、烏帽子、狩衣姿の6人の踊り手が太鼓のまわりを時計回りに踊ります。踊り手は手を挙げ、後ろを見るとき足の裏が見えるよう高く上げます。上下に体を大きく動かす、中世の念仏踊りを彷彿とさせる踊りです。踊り手は長坂の上組、中組、白銀の3組から2人ずつ未婚の男性から選ばれます。景行天皇がこの地を訪れた時に村人が松明を持って出迎えたのがこの踊りの始まりであるという伝説もありますが、江戸時代には盆の16日に踊られており、古い盆踊りの姿を伝えているのかも知れません。



古代楽

玉名郡南関町小原 1974年撮影 35mm カラーポジ

4月15日の夜、小原の天満宮の境内に祭られる祇園社の祭りで演じられます。楽手10人（進行方向左側で締太鼓の音が低いドン5人、右側で締太鼓の音が高いカン5人）、イサミフリ3人、笛5人以上、提灯持ち10人で演じられます。まず、公民館前で「神納」、「くずし」、「神囃」が演じられた後、三個の提灯持ちを先頭に神社へ向かいます。参道で「神納」、「くずし」、「神囃」を各2回演じ、天満宮の社殿を2回まわり、祇園社の前でまた、「神納」、「くずし」、「神囃」が各2回演じられます。この時は祇園社に灯された灯籠に花火も添えられ、幻想的な雰囲気醸し出します。



このみや踊り

菊池市玉祥寺 1974年撮影 35mm カラーポジ

玉祥寺の春日神社祭りは2月28日で、祭りの世話をする座組の交代、節頭渡しが行われます。27日は祭りの通夜をするといひ、神社でお籠もりをします。この時、神社の拝殿で演じられる踊りがこのみや踊りです。もとは28日の祭りの夜に神社だけではなく座元の家などでも演じられていました。踊りは神殿を背に座る2人の御大将の前で踊られます。御大将は夜着を尻からげに着て、馬の口元を帯にします。頭には編み笠をかぶり、背には立杵を背負い、胸の前には神田の粳が入った錢袋と呼ばれる袋を提げています。御大将の両横には太鼓打ちが座り、拝殿の四隅に歌を歌うサンガシラが座ります。踊り手は新旧座組から一人ずつ出ます。男性ですがこの1年間に嫁入りした花嫁の衣装を着て、頭には手拭いを被ります。昔の饗宴を思わせるゆったりとした踊りです。



赤仁田の盆踊り

阿蘇市波野赤仁田 1975 年撮影 35mm カラーポジ

8月14日の夜、赤仁田地区で若精霊を慰めるために踊られる盆踊りで、5時頃から順々に初盆の家をまわり庭先で踊られます。口説き手（歌を歌う人）が踊り手を先導して「御免下されこの屋の亭主」ではじまる「二つ拍子」を歌いながら円陣をつくりまわります。踊り手を迎える家では初盆を迎える故人の遺影を胸に持ち出迎えます。踊りはすべて口説きに合わせて踊るもので、皆浴衣姿で手拭いを首に掛けます。昔は女性は手拭いをかぶり片端を口にくわえ顔を隠して踊ったといひます。円陣ができると扇を持って踊られる「左衛門」、「八百屋」、手踊りの「七つ拍子」、扇を持った「東山」、「三勝」と続き、写真にある三種類の竹棒を持って踊る「団七」を踊り、最後に「三つ拍子」で終わります。



二瀬本神楽

上益城郡山都町柏 1973年撮影 35mm カラーポジ

1月24日に二瀬本地区の火伏せ地蔵の祭で夜を徹して演じられる神楽です。天明5年(1785)に宮崎県の五ヶ瀬町から伝えられたといえます。現在は地区の公民館で演じられていますが、この写真が撮された頃は、大坊主とよばれる1年交替の座元の家で座敷で演じられていました。床の間には御幣が祀られ、四方に笹を立てこれに注連縄が張られます。その上の鴨居にはエリモノと呼ばれる切り紙で飾られ、天井からはクモと呼ばれるエリモノで飾った天蓋が吊されます。神楽は夜7時過ぎ「神下ろし」で始まり、「鎮守」、「花受」、「八ツ鉢」、「柴引き」など途中夜食の休憩を挟みながら16番程度舞われます。最後の演目「大神」が終わるのは翌朝の8時頃になりました。



八代神社の田植祭

八代市妙見町 1971 年撮影 35mm カラーポジ

年初から春先にかけて、各地のお宮で御田植神事などと呼ばれる行事が行われます。これは田植えを模擬的に行うことで、その年の豊作を祈願する農耕神事です。

妙見さんとも呼ばれる八代神社では1月3日に田植祭が行われます。拝殿の中で神職が田打ちや畔作り、代かきの動作をし、種粃をまいた後、松葉を苗に見立てて田植えの所作を行います。

暦のない時代には、種まきから稔りがもたらされるまでの周期を一"稔"つまり一"年"と考えていました。稲作を主としていた人々にとっての一年は米作りの開始から収穫までを指しました。しかし中国から立春の頃を一年の始まりとする暦が伝わり広まると、米作り開始に関わる公の儀礼はだんだんと暦における年初に移動していったと考えられています。



スッキヨン

八代郡氷川町宮原 1983年撮影 35mm カラーポジ

現在日本では、満20歳をもって成人、つまり大人の仲間入りをしたと承認されます。しかしかつては15歳前後で大人と見なされていました。男性の場合、多くは若者組に入る儀礼をもって成人の祝いとされていましたが、中には試練をクリアしなければならないものもありました。

氷川町早尾の若者入りの儀礼はスッキヨンと呼ばれ、新年最初の寄合で行われます。新入りの若者が唱え事をしながら、巨大な木造の男性器を膝の上で撫で、左右に勢いよく振り上げます。次に、徳利、杓子などが載った三方に男性器をのせ、これを三度持ち上げます。最後にコエミシリといって、得意の歌を歌います。こうして大勢の人の前で勇気や腕力を示すことで一人前と認められていました。なお、現在は、消防団の入団式として執り行われています。



サンヤサン

熊本市南区良町 1977 年撮影 35mm カラーボジ

特定の月齢の夜に集まって、忌み籠もり、飲食したりして、月の出を待ち拝む習俗があります。月待ち、月待ち講などと呼ばれています。特に、正・5・9月の二十三夜待ちは、全国的にも盛んに行われていました。県内ではサンヤサン、サンヤマチなどといいます。県内では正・5・9月の二十三夜の月に供えものをするとところは多く、この月を拝むと長生きするなどといわれています。

良町のサンヤサンはちょっと変わっていて、毎年1月23日に行われる子どもの行事です。顔に絵の具や墨などを塗って変装した子どもたちが「ミナイサ、ミナイサ」と言いながら各家を廻って踊ります。家では、お礼に餅やミカンなどを渡します。全戸廻り終わると、貰った餅などでぜんざいを作り、会食を楽しみます。



伊倉北・南八幡宮の練り嫁

玉名市伊倉南方 1971 年撮影 35mm カラーポジ

伊倉八幡宮と南八幡宮は二つのお宮が道路を隔てて向かい合う、全国でも珍しいお宮です。両八幡宮とも4月と10月の15日に例祭が行われます。祭では当番となった地区の未婚女性が花嫁姿でお宮までを練り歩く「練り嫁行列」が行われます。若い娘が怪物の人身御供とされていたのを、旅の六部が連れていた犬に助けられたという伝説があり、そのことに感謝して始まった行事といわれています。祭は大変華やかで、かつては未婚男女の出会いの場ともなっていたそうです。最近では年少の女の子とその母親も参加しています。

県内には他にも阿蘇神社の御前迎え、菊池市稗方の嫁取り祭など、結婚式を模したような祭があります。嫁を迎えるとはすなわち男女が結ばれることであり、それによって新たな生命の誕生、つまり五穀豊穡となるようにという祈りも込められていると考えられます。



水神祭り

上益城郡御船町滝尾 1977年撮影 35mmカラーポジ

水は生活に欠かせない大切なものです。田の水口や井戸、川の洗い場、水源、ため池などには水神さんが祀られ、その恵みに感謝して祭りが行われています。

御船町の上梅木地区では、水神祭を4月17日に行っています。井川祭、水道祭とも呼ばれ、生活用水をもたらしてくれる水源に感謝する祭りです。お供え物の入れ物と、その供え方が少し変わっています。稲藁を編んで、直径20cmくらいの鳥の巣の形を作り、そこに直径3cmくらいの小麦粉の丸いダゴを山盛りに乗せます。更に、長さ15cmくらいの竹串に同じダゴを刺し連ねたものを4本作り、縁に突き立てます。これと組の戸数分用意したカケグリ（竹筒で作ったお神酒入れ）を貯水場の脇に設けた竹棚と水源に供えます。この後、ダゴは皆に配られますが、昔は子どもたちが奪い合っていたそうです。



円性寺の四十八夜大法要祭

天草市栖本町湯船原 1984年撮影 35mmカラーポジ

湯船原の浄土宗円性寺では、4年に一度、2月中旬から4月上旬にかけて、四十八夜大法要祭という全国的にも珍しい行事が行われています。鎮西上人が、開祖法然上人の教えを受け継ぐため、熊本で48日間念仏を唱えたのが始まりとされています。

最終日、檀家の人々は戒名を書いた卒塔婆を、本堂に置かれた全長3mほどの木造の精霊船に積みます。この船は本尊の観音像と綱で結ばれ、さらにゼンノツナと呼ばれる18本のさらしの反物が扇状に天井に張られます。このゼンノツナは祭りの後に切り分けられ、妊婦の腹巻などに使われました。本堂で法要、説教が行われた後、精霊船は海岸に運ばれて漁船にのせられ、檀家の人達に見送られながら沖合に運ばれ海面に下ろされます。そして僧侶たちの読経とともに火が付けられ、炎をあげながら海に消えていきます。



端午の節句の地搦き

熊本市南区白石町 1990年撮影 35mmカラーポジ

地搦きとは家を建てる際に、柱下の地面を搦き固め礎石を置いていく基礎工事です。重機などなかった頃は地域の人総出で行われていました。これは、大勢の人が力を合わせて地を搦くことで、土地から悪霊や災厄を追い出し、福を招くという呪術的な意味も持っていたと考えられます。

白石町の六反田・妙音・平木の3地区では地搦きの保存会を結成し、昭和58年から初息子が生まれた家で、端午の節句に、子どもの無事の成長を祝って地搦きを行っていました。紅白の捻り鉢巻きをして父親に抱かれた初息子の前で、白法被姿の人々が引き綱をひき、「エイト、エイト、それ頼むぞえ、今日は御家の地固めぞー」など、いくつかの地搦き音頭にあわせて地搦きを行い、最期に竹竿の上に色紙をつけたボンデンを祝いに残していきました。



野原八幡宮の御田植祭

荒尾市野原 1976年撮影 35mmカラーポジ

本格的な田植えシーズンに入る前に、各地の神社などで、田植えを儀礼的、芸能的に行って豊作を祈願する田植祭が行われます。

野原八幡宮の御田植祭は、6月20日頃、お宮の所有する神田で行われています。袴に陣笠姿の大田主が鈴を振って音頭をとり、数人のウタヒメの唄いに合わせて、緋の着物に赤い腰巻き、赤たすきを着け、菅笠を被ったサオトメ十数人が田に苗を植えていきます。

稲作農耕を主としていた人々にとって、田植えは大切な農作業の一つで、田植祭は重要な神事とされてきました。しかし、農耕機械の導入などで田植えの様子が変わってきたことで、田植祭を行うところは次第に少なくなっていました。野原八幡宮の御田植祭も戦後途絶えていましたが、昭和48年に復活しました。



サナブリのお座敷田植え

阿蘇郡小国町上田 1973年撮影 35mmカラーポジ

田植えが終わるとサナブリ、サノボリ、アシアライなどと呼ばれる祝いが行われます。サとは田の神を意味し、植え付けを見届けて天に帰る田の神に、田植えが無事終了したことを感謝し、豊作を祈る行事と考えられています。県内では、餅や団子などお神酒を神棚に供えたり、かまどに苗を供えたり、農具を洗ったり、田植えを手伝ってくれた人で集まってごちそうを食べたり、温泉など小旅行にいたりなど様々な形で行われています。

小国町江古尾地区のサナブリ祝いは、お座敷田植えと呼ばれていました。田植えが終わると、地区の人びとが集まって会食が開かれます。その中で、白粉を付けた青年たちにより、座敷で、稲の収穫までの一連の所作がおもしろおかしく演じられました。県内でも数少ない形の農耕儀礼でしたが、現在は行われていません。